戦前期日本における「農村社会学」の成立・展開過程の再検討（３）

――新資料を踏まえた石神調査の再検討から――

岩手県立大学盛岡短期大学部　　三須田　善暢

1　目的

これまで本報告者の三須田は、アチックミューゼアムが 1935 年からおこない、有賀喜左衛門の著名なモノグラフ『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』（1939 年）に結実した岩手県石神村調査を、調査対象者である石神大屋齋藤家の資料および調査者の資料を調べなおすことから、その再検討を試みてきた。具体的には、土屋喬雄の石神調査ノート、土屋と布施辰治との論争、有賀と大屋齋藤善助との往復書簡等を紹介・分析してきた（三須田ほか「土屋喬雄の石神調査ノート（一）～（五）」「石神調査をめぐる土屋・布施論争について」ほか）。その過程で、有賀旧宅所蔵の資料の閲覧が可能となり、ご遺族の許可をえて今回報告する研究グループで分析をおこなうこととなったのである。

資料は段ボール箱で 6 箱ほどであり、現在その撮影・解読をおこなっている最中であるが、そのなかに石神調査関係資料も残っており、1935 年に有賀が石神調査をおこなった際の調査ノートと、インフォーマントである郷土史家の佐藤源八が執筆したと推測される「石神誌」、齋藤からのさらなる書簡も見つかった。

そこで本報告では、それらの紹介をおこない、これまであきらかにされた土屋の調査ノート、有賀・齋藤の往復書簡から得られた知見との比較をおこなうなかから、有賀の石神調査の特徴を明らかにしたい。特に、柳田民俗学を脱して有賀独自の観点を見出し、モノグラフを重視した有賀の社会学を確立していった過程において、この調査の与えた影響や示唆を考えてみたい。

2　方法

報告者は、土屋の石神調査ノートの翻刻と有賀モノグラフとの比較をおこなっており、また、2015 年の日本村落研究学会大会において、有賀・斎藤の往復書簡の紹介・分析をおこなっている（「書簡にみる有賀喜左衛門調査の特徴：石神大屋齋藤家所蔵資料から」）。本報告では、これらの研究成果を踏まえて、あらたに利用することが可能になった有賀の調査ノートと佐藤源八の資料を使い、分析を試みる。

3　結果

現時点ではまだ分析は十分に完成していないが、有賀の調査ノートからは土屋とは異なり山林・漆器業への聞き取りがみられること、および、佐藤源八による「石神誌」からは有賀と斎藤善助の間でおこなわれた（現存する）往復書簡での質問事項をはるかにこえる質・量の回答がみられることがわかる。これらの事実は、先行研究では不明であった点であり、有賀の経済的要因への関心と、モノグラフの作成過程におけるインフォーマントの重要性をいっそう際立たせることになろう。

4　結論

現存する有賀の調査ノートおよび佐藤の「石神誌」のみでは、有賀のモノグラフの全データには足りていない。おそらくは欠損したノートや資料があると思われる。こうした資料の制約を踏まえたうえではあるが、有賀の新資料を利用することによって、集められたデータのなかからどれがモノグラフに生かされどれが捨てられたかを明らかにする事が可能となろう。それを明らかにする事によって、有賀の思想的発展のなかでの石神調査の位置づけをあらためて検討し、社会学への立場の移行の問題性をさらに考えてみたい。